



DATE: 2001年2月18日

PLACE: 横浜アリーナ

撮影: 植田信(P84) / 大浜建一(P85) / 八島崇(P85\*)

## スガ シカオ

昨年の本誌でカバー・アーティストとしてインタビューに登場し  
自ら音に対する徹底的なこだわりを見てくれた、スガ シカオ。

今月のコンサート見聞録は、おなじみ横浜アリーナから  
強力なサポート・メンバーを率いた彼のライブの模様とPAを紹介しよう。

昨年の4thアルバム『4FLUSHER』リリース後、12月にスタートしたスガ シカオの全国ツアー“SHIKAO & THE FAMILY SUGAR Tour”。ライブ・ハウスで行う“STAGE1”、ホールで行う“STAGE2”、アリーナで行う“STAGE3”と題してライブを展開。今回レポートするのは、STAGE3で行われた横浜アリーナでのライブだ。入手が困難と言われているチケットを手にすることのできた幸運な観客でアリーナは埋め尽くされた。

サポート・メンバーはアレンジャーでありバンマスであるキーボードの森俊之を中心に、ベースの松原秀樹、ドラムの沼澤尚がバンドのグループ部分をがっちりと固め、ギターの間宮工、コーラスの大滝裕子と齊藤久美がスガ シカオの演奏に彩りを添える。いずれも実力派ミュージシャンだ。

ツアーPAを担当したのは、スガ シカオのライブを4年ほど前から手掛けている山寺紀康氏。バンド・メンバーとも付き合いが長く、そもそもキーボードの森氏を介してスガ シカオのツアーに参加するようになつたそうだ。今回のツアーのテーマ、問題点について山寺氏は語る。

「体が自然に動くような空間を作る」というテーマがありました。コアなファンだけでなく、一般リスナーとしてライブを見に来てくれるお客様の体を動かしたい……気持のいい音楽を聴けば自然に体が動

くはずだっていうのがスガ君の理論で、それをいかに伝えられるかがPA側のテーマだったんです」

そのテーマに沿って横浜アリーナのライブも行われるわけだが、これまでのライブ・ハウスやホールに比べて断然広い。メイン・スピーカーはCLAIR BROTHERS AUDIOのS-4システムをフランジングに、奥のエリアをカバーするためのデイレイ・スピーカーがPA席の真上に設置されていた。

「アリーナで音を均一に伝えるには最近主流のライン・アレイ・タイプの方が効果を発揮します。実際に前回のアリーナでは使用していました。しかし今回はホール・ツアーカーからの機材の流れもあり、場所により多少まばらになつてもロー・ミッドの押し出しの強い方がこの音楽を伝えるのには適していると思いS-4をチョイスしました」

そのほかの機材について見ると、メイン・コンソールはYAMAHA PM4000、アウトボード類は山寺氏所有の機材を中心にセレクト。マイクもボーカル・マイクをはじめドラム回りや各楽器用も大半が山寺氏所有のものである。

「ボーカル・マイクはBEYER DYNAMIC M600です。キレイでパワフルな音がするので、こよなく愛しています」。ファンを虜にするボイス・マジックの秘密はこのマイクにあると言える。

そして、スガ シカオの音楽に欠かせないのがキ



▲TUBE-TECH CL1A+AMEK System9098 EQ+MEDICI The Equalizer+BSS DPR-901IIIは、スガのボーカル用。ADL 1000はベース、一番下のDBX 160Xは森の打ち込みループに使用していた

▶空間系や音質補正系エフェクターなどが収納されたラック。左側上のHYFAX PEQ-622はメイン・スピーカーのチューニング用。その下はLEXICON 224、ROLAND SDE-2500、AMS RMX16といったリバーブ&ディレイ。右側はT.C.ELECTRONIC TC1128イコライザーとCLAIR BROTHERSオリジナルのチャンデバ群。ラック上はTC1128のコントローラー。左のMACKIE CR1604VLZはエフェクト・リターン用



▶今回の横浜アリーナ用に導入したスピーカーは、CLAIR BROTHERSのS-4システム。フライングが24本で、下が4本



▲DBX 160はWURLITZERとClavinet、DRAWMER DS 201はタム、DRAWMER DL241がFENDER Rhodes、DL441がバンド・コーラス、DBX 1066とUREI 1176がエレキギター用



◀PA席の真上に設置されていたS-4システムのデイライ・スピーカー。6本のモノラル仕様になっている

一ボードの森氏。今回のライブでもさまざまな鍵盤楽器を華麗に操り、またサンプラー・リズム・マシンなどを随所に盛り込みながらライブ全体を引っ張って行った。

「キーボードはそれぞれの特徴を生かすようにDIをチョイスしています。WURLITZERにはBSS AR-116、FENDER RhodesにはSTACK PSS-1Aを使いました。Clavinetは楽器セクション調達のSpecial Ampをマイク録りしています」

さらに今回は、アーニー・スペシャルとしてストリングス・カルテットが途中から加わりライブが展開された。その荒々しくも絶妙な響きを持って迫り来るストリングスは、鳥肌もの。どのようなマイキングになっていたのだろうか?

「ISOMAXというピックアップを使っています。イヤフォン・モニター、アクリル板の使用でかぶりを減らすことで、だいぶマージンを稼げました。そして主役でもわき役でもないところに音を位置させることに気をつけました」

こうして、さまざまなアレンジが加えられスタートし

た横浜アリーナ・ライブ。アグレッシブなブレイクビートのループが会場に響きわたると同時にステージ正面の丸いスクリーンに映像が流れ、メンバーの登場。一気に歓声が盛り上がる中、力強い沼澤のドラム・フィルを合図にライブはスタートした。前半はアルバム1曲目の「かわりになってよ」を筆頭にまさに体がグルーブする曲が並び、熱くなつたところでしばしクール・ダウン。懐かしのナンバー「前人未到のハイジャンプ」からは観客も椅子に座っての「アコースティック・タイム」に。途中予定外の「夏祭り」「坂の途中」の弾き語りに、だれもがじっと耳を傾ける。そしてストリングス・カルテットの登場。より厚みを帯びたパラード・アレンジを堪能した後は、再びアップ・テンポに突入。「SWEET BABY」ではステージの左右と正面のスクリーンにセクシーなダンサーの影、花火に炎といった独自の演出で会場を盛り上げる。そしてアンコール。名曲「夜空ノムコウ」を含む3曲を熱唱して、ステージを去って行った。

今年はカップリングや提供曲を集めたアルバムをリリース予定。今後も目が離せないだろう。



▲メイン・コンソールはYAMAHA PM4000。1~9chがドラム、10chがベースと順に立ち上げられていたが、何とキーボードの森は11~24chの計14chを1人で使用。卓の右上PCは、LinearX pcRTAという測定用のアナライザを動かすためのマシンだ



▶モニター・コンソールはYAMAHA PM3500。右手ラックにはTC1128のほか、KLARK-TEKNIK D N360やYAMAHA Q20 31BといったEQも見られる。またモニター・スピーカーはスガのみELECTRO-VOICE 1502で、ほかのメンバーはCLAIR BROTHERSの12AMを使用していた



◀キーボードの森俊之セクション。写真はAKAI PRO FESIONAL MPC60II、YAMAHA MD4S、WURLITZER KORG CX-3、YAMAHA P-300など。このほかCLAIR VIA DMI NordLeadやFENDER Rhodes、YAMAHA SY99なども並べられていた

▶PAエンジニアの山寺紀康氏。“オショーさん”の愛称で親しまれている



## SONGS

- ①かわりになってよ
- ②性的敗北
- ③ミートソース
- ④ヒットチャートをかけぬけろ
- ⑤正義の味方
- ⑥このところちょっと
- ⑦SPIRIT
- ⑧前人未到のハイジャンプ
- ⑨そろそろいかなくちゃ
- ⑩黄金の月
- ⑪夏祭り
- ⑫坂の途中
- ⑬これからむかえにいくよ
- ⑭波光
- ⑮AFFAIR
- ⑯あまい果実
- ⑰リンゴジュース
- ⑱イジメティミタイ
- ⑲SWEET BABY
- ⑳いいなり
- ㉑ストーリー
- ENCORE
- ㉒夜空ノムコウ
- ㉓ドキュメント2000
- ㉔愛について

## MEMBER

- スガ シカオ(vo,g)  
森俊之(k)  
松原秀樹(b)  
間宮工(g)  
沼澤尚(ds)  
大滝裕子(cho)  
斎藤久美(cho)

## STAFF

- PA／山寺紀康(オショーランド)、加藤恭行(TRY AUDIO)、竹田安範、佐藤和臣(CLAIR BROTHERS AUDIO)  
主催／J-WAVE、FLIP SIDE  
企画制作／オフィスオーガスター  
後援／スペースシャワーTV、キティMME  
協賛／ファミマ・ドット・コム